

## 若き者の悩み

### この手紙

私は本部に帰って、又すぐ講演に出發する、三時間ほどの間に、幾組かの人たちに面会し、たくさん集った御手紙を一通り目を通さねばなりません。同胞諸兄弟からの御手紙の中から、次のような御手紙の光っているのを見出すことが出来ました。私は荷物の中に入れて講演先きに出発する。

光明団執事を通じて住岡先生のみ前に

住岡先生御健在でいられますでしょうか。

やはり御健在で清い法の道に御暮しあらせらるる御事と蔭ながら、ひたすらに念じ申してまいります。どうかどうか御健在でいて下さいませ。

こんな手紙を差上げます事はまことに御無礼の事と存じましたけれど、明るい世界を求むるの切なさに、私は立つても座してもいられなくなりまして、私はもう自己の全てを赤裸々に住岡先生の御まえに投げ出して、御先生の強い御鞭に打られたさに、この挙に出でましたはしたなさを御許し下さい。

御先生

懐しい御先生(こんな言葉を用います罪をせめないで下さいませ。御先生に対する私の心持を十分に表す言葉を見出せないのでもございます。)

私は住岡先生の御前に泣き伏します。

意気地なしお人よしとせめないで下さいませ。私は意気地なしお人よしを超越するためには余りに罪の深さに泣き伏す者でございます。

先生

文が進むにつれてどんな御失礼な言葉が出ます事か解りませんが、どうか御許し下さいませ。又しどもどろの意の解せない点がございませば、おそれ多い事でございますけれども何卒御判読下さいませ。

御先生 私の永年の悩み、それは私一人の淋しい歩みそのものの悩みでございます。

私は清くなり聖ならんと欲して、清くなり聖なる能わず、求め泣き伏す私が少くとも私の周囲に於て最も大なる罪悪者となっていた事が悲しいので御座います。

私は第一に最も大なる親不孝者となっていました。私は進むに進まねず、退くに退かれず、いよいよ罪を重ねて泣き伏します。

先生!

私は浄土に参る、そんな事を考える事さえ恐しくなっています。私は地獄も地獄、最も苦しい地獄に沈んで泣き苦んだ方がよりよく楽土であるような気がしてなりません。

御先生!

私に進む道を教えて下さいませ。

御先生。私は御先生の御講演を聞かせて頂いた日、それは私の恵みの日でございます。私は今まであんなに感激した事はございませんでした。私には百の説法も何の効果もない程に私の心はまがりまがりがついています。私はあの御先生の熱の満ちた御親切な内心より涙のほとばしり出る、あのひきしまった演壇上のお顔を拝したとき、その刹那、その一分時は、私の凡ての悩みを解決した時でございます。絶対他力の弥陀に救済された御慈悲に接した厳粛な時で御座いました。

壇上のあの厳粛な御姿、一度講師部屋に御帰りになったあの優しさがいつわりであるならば、すべての社会は暗黒なのだ。私は絶対に御先生を信ずると強く叫んだので御座います。同時に私は今後千回御先生の御講演を拝聴致す事を心に誓いました。その願の出現する日を涙の中から所願致しております。

御先生！

けれど私の心の裏にはこんな心の起る事を愁しみます。先生は山師なのだ。大なる野心を存するために、厳粛な仏を道具にする山師であると思う心であります。私はこの心あるが故に幾度か泣かされるのでございます。その度に御先生の壇上の涙の御顔をまぼろしに拝しつつ自己の宿業の恐しさに泣き沈みます。許して下さい。そして、御先生どうか私に道を教えて下さいませ。

先生、私は長男でございます。私の一挙手、一投足はすべて両親の肺腑をえぐるものでございます。私の一挙手は全て家名にきずするもので御座います。先生私は一たいどうしたらよいのでございましょう。私は過去に於て身の毛もよだつ程の罪しるから悩むのだとも感じませんが、私の心の奥底には不思議な心の暗さを、それは自分にもわかりませんが、持っているものであります。私は悩み苦しむ沈思するのが常でございます。沈思する自己の頭上には大きな罪悪がせまつて来る、そして一層深さに沈む。

沈思は親不孝の種であります。時には恋に悩める者として社会に宣伝され、時には社会主義者のように思われ、時には馬鹿だお人よしだと拝され、賢いのだと評され、時に天上まで上らされ、時に地下につき落され、人の足下に踏みにじられる。その中を黙々として歩む私の悩める魂は次第次第に大きくされて行くのでございます。

肉体的にだんだん自滅して行く  
精神的にだんだん自滅して行く

その自分をながめては熱い涙が両頬を伝わるのをおぼえます。だんだんと年老いて行かれる御両親をながめては、どうして泣かずに行われましよう。御父さん御母さん御許し下さい、先生、私は幾度泣いたでございましょう。

「あなたは永遠に死なないのですよ。」

この先生の御言葉を幾度か反問しつつ亦黙々の中を歩みゆく。涙の海を歩みゆく。そして不幸より不幸へと益々不幸を重ねつつ、その波紋を一層大きくしてゆく。お父様すみません。私の力が足りないのです。この世で孝行が十分盡せぬなら未来で全ての力をつくして仕えます。許して下さい。涙の中から願う私を見ては父は念しかしていられます。我が子をよく理解しながら家業がおろそかになり勝ちになれば父

は又泣かれます。年老いたる父母、長男、家名、罪惡の自己、宿業、死、未来、魂、私又しても暗涙にむせびます。

他人は幸福そうに暮らしているのに自分のみこんなに泣くことは、自分一人が間違っているのだと思いつつも泣く。御前は馬鹿なのだ。低能なのだ。低能で馬鹿は清くなる権利は無いのかと思いつつ泣く。(中略)

御先生、私は再び申し上げます。浄土にまいるそんな願いをおこす事はおそろしい事だと思えます。御先生どうか道を教えて下さいませ。

先生私は勉めます。強い信念を与えて下さいませ。勇氣と大胆、強い念仏の行者として力強い人生の歩みを私に与えて下さい。

私が念仏の真の行者となり得るならば、私は御先生のために死にます。

御先生、強い信者として御導き下さい。先生の講演日程が知らせて頂けたら、幸と存じます……略

大地は若い

以上は三尋以上ある手紙をぬいて書いたのである。

私は幾度か合掌した。

私は幾度か拝読した。

合掌してついに念仏のみである。

噫、地上にもこうした尊い涙があるのか。

現代青年にもこうした人があり得るのか。

大地は若い。大地は永遠に若い。

吾人は悲観せよとも言わぬ。厭世家になれともすすめぬ。けれども、現代の青年は、あまりに安価なる楽道家である。

こうした尊い血と涙にぬられた記録がどうして私に捧げられる価値があるろう。教えるとか、導くとかそんなことを超えて、私の胸に湧く全てを書かねばなりません。

煩悶

「明るい世界を求むるの切なさに、私は立つても座してもいらなくなりました」

そのあなたの言葉を捕えて、煩悶の二字を書いて一種の靈感を憶う。煩悶とは、人の心の内におかるる、悩みであり、悶えである。私は今更に煩悶という二文字が我々人類の生活に深刻なる関係を持つことに驚嘆する。誰でも煩悶しないものはない。大か小か、小なる煩悶は毎日繰り返され、大煩悶のためには死する青年さえある。私は煩悶の尊さを憶う。悉多太子をして人生に対する悶えを取り去らしめよ。そこに後の釈尊があつたであろうか。目覚めたる者は一度、必ず心の暗さを見出さねばならぬ。暗い心を暗いとも知らず、いい加減な道草に心を奪われて、目覚めない者のその明るさは、真理の刀先きで触られたら、すぐにも失われてゆく明るさであり、平安である。

明るい胸、清い心、それはもちろん尊いことであり、万人ののぞむところであるけれども、人の心が永遠に明るい胸であり清い心であり得ようか。明るいと思っている人、清いと自任している人にどうして道を求めて出ねばならぬ心が動こうぞ。

その心こそ、過去一切の聖者、偉人たちの尊き一生の幕が切つておとされようとした前の序曲ではなかったか。

釈尊の胸も暗かった。龍樹菩薩の胸も親鸞聖人の心も暗かった。

夜の暗さなしには、黎明はない。

東雲の横雲がかすかに色づきそむる時、まだ大地は暗黒にねむる。

久遠の眠りから人の心が覚める時、人は先ず我と我が心の暗さに目覚める。

夜明を待った者にも、黎明の光がなつかしい。

我と我が心の暗さに目覚めた者のみ、我を訪れる光がほしい。

目覚めて夜明けを待つ心、やがて東天には明星の光がうすれて、紫におう横雲が動く。

あなたは、あなたの暗さに目覚めて来た。暗きに泣く心、それは光を求める心である。法身の心霊の東天にはやがて真如の太陽は光を表す。

「赤裸々に……投げ出します。」

赤裸々になり得る心、それは無我になり得る第一歩である。

装われたものにして真実があるう。包む心の前に何で道が開けようぞ。

赤裸々に投げ出す心、その心、救われる心である。自力無効に徹底した、恵まれた人のみ、一切を教えの前に投げ出し得るのだ。その投げ出す心、それは即ち聞く心である。受け入れる心である。救われ得る心である。

一切を投げ出し得る心。それについては考えて見ねばならぬものがある。

一切を投げ出し得る心、その裏には、投げ出さした力がある。その力は何か。その力は何か。その力が、法然上人の前へ、親鸞聖人の全部を投げ出させた力であり、熊谷直実をして、弁円をして一切を投げ出して救わねばおかなかった力である。

泣き伏されて

紙面全体に流れるあなたの謙虚、そのへりくだる心さえ、私を合掌さすには充分である。「おなつかしい先生」そのお言葉がどうして罪でしよう。失礼でしよう。学位なく、肩書なく、地位なく、その他全てを持たざる私の幸福は、万人が兄弟として友として抱くことの出来る心安さである。

「私は先生のみ前に泣きふします。」

私はそれには値せぬものです。けれども私は涙と涙の通う世界はそれが決して金力からも権力からも来ないことを知っています。涙と涙の通う世界、それは人間と人間との間にゆるされたたった一つの世界であります。たとえ親は一文不知の乞食であろうとも、子供はその親の膝に泣き伏します。私はこの意味において、あなたと抱き合い、語り合わねばなりません。

私が御手紙の返事を書いたとて、私を清い者として受け入れては下さいますな。人格者として尊い偶像として拝跪されるには、私はあまりに涙に充ちた凡夫でありませぬ。あなたの涙は、私の涙に通じます。罪深き者が、罪と悪を見つめて罪の子の胸に流るる人間総一貫の涙をもつて結ばれねばなりません。

清くなり、聖ならんと欲して

清くなり、聖なる能はず

あなたの永年の悩み、それはあなた一人の淋しい歩みそのものの悩みであった。何故に悩まねばならぬ。それに対してあなたは告白する。

清くなり、聖ならんと欲して

清くなり、聖なる能はず

これはこれ、地上に於ける最大なる、最高なる悩みである。目覚めたる者の必ず持たねばならぬ悩みである。

尊い哉、その悩み

仏の隣せる悩み

黎明の前の暗黒

信仰の生れ生づる素地

人間浄化の悩みである。

現代人は、金について悩む、地位について悩む。そうした苦しみは、他の力を借りることも出来る。社会的に活動するならば幾分か満足も出来る。けれども内面的な、清く聖ならんとする悩みは、過去の親鸞も、釈尊も、孔子も、それらの人が聖者であったことが今の私をどうにもしてくれぬ。父や母、兄弟、その他全ての人たちのものが自分のものとはならぬ。唯私一人でどうにかせねばならぬ悩みである。

この願いのために過去の人たちが全部悩んだのである。私どもはこの願いを失つてはならぬ。世には聖者として神人として、菩薩として自任せる人は多い。清くなり得たと広告する人も多い。けれどもそれはこの悩みの声のうすれた人たちではあるまいか。一生この聖化しきらざる自分を抱いて悩める人こそ尊いと思う。

あなたは「泣き伏す自分を、意気地なしだ、お人よしだと責めないでくれ」と言つた。聖化されない自分を見つめて泣く者を誰が意気地なしと言つた。お人よしだと言つた。それならば過去における、心中の賊を見つめて泣いた過去の聖者たちは全部お人よしなのか、意気地なしなのか。

極楽に……それは恐しいことである

「私は浄土に参る。そんな事を考えることさえ、恐しくなつてまいります。私は地獄も地獄、最も苦しい地獄に沈んで泣き苦んだ方がよりよく楽土であるような気がしてなりません。」

何という悲痛な告白であろうか。まことに私どもが妥協もせず、ゴマ化しもせず、私の心の動きを見るならば、救うべからざる者である。

善導大師は、無有出離之縁の凡夫と泣き、源信は極重悪人と言ひ、法然は十悪の法然房と泣き、親鸞は必墮無間とひれ伏した。

今の浄土真宗の現状を願う時、目覚めない人たちが深い自分の内面的反省を有せないものが、ただ徒らに往生極楽をのぞんで、右往左往する有様、それは決して正しい宗教の天地でも何でも無い。

清くなり、浄化されようと願う、聖ならんと願う人たちには、必ずあなたのような悲痛な告白がつきまとう。

まことに鋭い智慧光に照された時、しよせんは必墮無間の私である。往生浄土などと客観的に作られた浄土で楽しまんとするが如き願いがおころうはずがないのである。

然しながら

然しながら、あなたは今

あなたをあなたの問題として

あなたがあなたを救いあげようとしていることは事実であります。

そうして、自分では自分を救うことが出来ぬことに目覚めて、かくまでに苦んでいる事も事実であります。

これをお考えの根本において私は話を進めねばなりません。釈尊は一代に八万四千の法門を説きました。法とは何か。法とは真理の活動を文章又は言語にしたものがあります。真理が私どもの裏に動く様を説いたものであります。ですから法を聞くことによつて、私どもの心は育てられて来ます。真理と一致せざる私どもの考えを邪見とか外道とか申します。真理と一体たらんとすれば真理を聞かねばなりません。釈尊は大無寿経の中に、一切万人の裏に動く、如来の救済を説きました。釈尊はなれて阿弥陀仏はなく、阿弥陀仏をはなれて釈尊はない。無我の悟りに入った釈尊の衷心に動く力は法然であり、阿弥陀仏でありました。けれどもこれは単に釈尊御一人のみ胸の問題ではなくて私や、そしてあなた、更に一切万人の衷心に実在する活きた力であります。

私が私を問題とするに先だちて

あなたは今の今、ほんとうのあなたに目覚めて、恐るべき悩ましきあなたを知りました。そうしてそのあなたをどうすればいいかに苦しんでいます。

静かに聞かねばなりません。

目覚れば目覚るだけ、あなたは自分のどうにもならぬことにおどろいて、絶望のあなたを抱いて泣くより外に道はなくなります。しかも、その泣くあなたの涙の中にはあなたを浄化したり救つたりする力はないのであります。目覚めれば目覚めるだけ、私の考え、悲嘆の中には私を私が解決づける力のないことがわかつて来ます。

静かに聞かねばなりません。

私が私を抱いて今更におどろくのに先だつて、私が如来の問題となり、私が今抱いて泣いているこの私が、如来によつて抱かれて、如来の涙の種となつたのであります。あなたに先だつて泣いてくれた如来の活ける大慈悲心の中に、あなたが仏となる道が開かれてあります。

如来の成就せる南無阿弥陀仏の中にこそ、あなたを浄化しきる慈悲と智慧とが充されてあります。それをこそ素直に受け入れなくてはなりません。

### 聖化

私どもの裏には、自分の生活を樂化したい要求と、善化したい願いと、聖化したい願求とがあります。如何に樂になりたいと願つても苦は容赦なく私におしかけます。如何に善化しようとしても、善人たらんことを求めることが強ければ強いだけ、悪人だという悲しい目覺めに深入りせねばなりません。人の歩みは、何時までも、善悪、善悪の歩みであり、苦樂、苦樂の生活であります。樂になりきつたり、善人になりきつたりすることは出来ないであります。

小さい善に安住したり、さほど苦なく暮しているということは、聖化したではありません。浄化したのではありません。

善導大師は「罪悪生死の凡夫」と申しました。罪とは真理に反逆して、人間の小さいはからいにこだわっていることでもあります。正法を謗ることでもあります。真理に合わせない私どもに罪が生れます。罪をはなれた悪もなければ苦もありません。

如来は私どもの罪を救い、悪を転じ、苦から救おうとします。

聖化するとは今現に生きて働いている如来のみ心を知らせて頂くことでもあります。見よ、あなたはその如来のみ心に動かされているではありませんか。あなたは今のあなたのほんとの姿に目覺めて泣いています。その目覺めこそ如来のみ心に照されているのであります。如来の問題になつたあなたが見えて来たのであります。

静かに聞かねばなりません。

如来は、そうした、久遠のなつかしい傷ましいあなたのほんとの姿を抱いて泣いたのであります。

### 覺めたるが故に

人は眠れるが故に道を求めぬのであります。

自分のほんとうに目覺めた者は、きつとじつとしてはいられます。

覺めたるが故に道を求めて出でなくてはなりません。

暗い故に光をたづねて出でなくてはなりません。

道を求めて出る心、その心こそやがて救われる心であります。

道を求めて出る心の底には如来のみ心が動いています。

如来のみ心に動かされて、如来の声をもつとはつきり聞かねばなりません。

まことに、治りきらぬ病をかかえて泣いている人は、静かに治して下さる医者的心を聞いて、その力を受け入れなくてはなりません。

罪深い、悩み多き我にめざめた者は、謙虚にへりくだつて、全部を如来におまかせします。大地の上にひざまづいて生きて行く者こそ、全部が如来によつて立たされている嬉しさを感ずります。

如何にもがいても、苦んでも、そのもがきや苦しみからは、何の力も生れては来ない。それよりか、その私を癒しきろうとして働きたもう如来の心に目覚め、静かに宿業をはたさなくてはならぬ。

虹のような感激も失せるでしょう。泡沫のような法悦も去るでしょう。甘たるい涙もなくなるでしょう。けれども、み声を聞こうではないか。如来は我を南無阿弥陀仏とよびたもうてあります。

## 二つの心

あなたは御手紙の中に

「壇上のあの厳肅な御姿、一度講師部屋に御帰りになったあの優しさが、いつわりであるならば、全ての社会は暗黒なのだ。私は絶対に御先生を信ずると強く叫んだので御座います。同時に私は今後千回御先生の御講演を拝聴致すことを心に誓いました。」というていられます。

へりくだった、なつかしい心であります。けれども、次には

「けれども私の心の裏には、こんな心の起る事を悲しみます。先生は山師なのだ。大なる野心を有するために厳肅な仏を道具にする山師であると思う心であります。私はこの心あるが故に、幾度か泣かされるので御座います。その度に御先生の壇上の涙の御顔をまぼろしに拝しつつ自己の宿業の恐しさに泣き沈みます。」

「御先生どうか私に道を教えて下さいませ。」  
と言わずにはいられぬものがあります。

二つの心。絶対に信ずる心と、人を疑つて悪魔のように見ようとする心と、人の心は分裂して来ます。全て真剣に道を求める者は、何によらず、この二つの心を知つて来ます。道を求めることいよいよ急なれば、全く道を求めることを妨げる心が裏に見えて来ます。

心を散らすまいとして散る心が見えます。

信じようとすれば疑う心が表れます。

この心故に人は苦しむのであります。深く私を見つめる時、私の裏には、私の手におえぬ恐しい力がひそんでいて、常に私を泣かせます。私が壇上に立つて叫ぶ時、それこそ夢中であり無我であります。けれども、その時すら、私の中の悪魔は頭をもたげているのでしよう。

仰せの通り私は救うことの出来ぬ悪魔の本尊を抱いた地獄一定の悪人なのです。もし私からみ仏をのぞく時、そこには恐しい悪魔の形相のみ残ることでありましよう。けれどもこの悪魔の本尊こそ如来浄火の燃えたもう炭であります。私にもし悪魔の形相より外のものがありますならば、それは私ではなくて如来であります。私に即して動きたもう如来であります。悪魔の本形こそ久遠の私であります。

悪魔の本形と如来とは一体でありたもう。さめることなき無明業たる機、さめきりたもう如来、それは決して二つが二つになつてはいませぬ。悪魔をして仏たらしめる



如来の本願力の中に、悪魔が悪魔のままに救われる力と理由とがあります。如来の心一つで救われる機法一体の仏心が私の裏に顕現れて下さる時、二つものが二つにならず、一つになつて、一つの道を進んでいることに目覚めて来ます。

悪魔がないことには如来もないのであります。

私はあなたの声を聞くと、あなたの裏にもこの二つのものの動いているのを見させてもらいます。けれども、もつとはつきり如来の声を聞かねばなりません。

あなたのみ口から如来の名告りたる南無阿弥陀仏が聞え、あなたのみ手が如来によつて合掌させられる時、如来は久遠のあなたを摂取不捨したもうた時であります。求めねばなりません。

沈黙

あなたが沈思していると

「時には恋に悩める者として社会に宣伝され、時には社会主義者のように思われ、時には馬鹿者だお人よしだと評され、賢いのだと評され、時には天上まで上らされ、時には地下までつき落され、人の足下に踏みにじられる。その中を黙々として歩む私の悩みは、次第々々に大きくされてゆくのでございます。」

私どもは世間の様子を全く眼中におかないで暮すことは出来ません。けれども世間の批評にのみ心を奪われていることはあまりに無智だと言わねばなりません。

たとえば世間があなたを馬鹿だと言つても、それであなたが馬鹿にはなりません。

たとえば世間があなたを賢人だと評しても、それであなたが賢者にはなりません。

たとえば世間があなたを善人だとほめても、それであなたは善人ではありません。

たとえば世間があなたを悪人だと笑つても、それであなたが悪人ではありません。

あなたはあなたであつて、世間ではありません。

世間の評よりはあなた自身が大切です。

ですから私は、世間の評に耳をかすよりは、私自身がどうであるかを見ます。世間の評は無責任であります。

私は世間の無責任の評よりは、もつと自分をはつきり知ることが出来ます。私が悪くない時、世間から誤解された時には、笑つて黙つていられる嬉しさがあります。

もし自分に悪いところがあるのに、世間が反対によくとっている場合があります。そんな時には、私はやつぱり駄目なのです。

でも世間の評も耳に入るでしょう。これはそれを利用するのです。世間の許によつて自分のほんときを知る時もあります。

目を内面に

どこの家庭が悪い、誰々が悪い、何が悪い、彼が悪い、と世間を攻撃ばかりして暮している人がある。しかしそうした人は、多くは目が外にのみついている人であります。他人を見ている暇には私は私を見ねばならぬのです。隣の家庭が腐つていっていることは、私の家庭が腐つていっていることではありません。彼が悪いと言うことは、私が悪いこととはちがいます。

釈尊が偉人であったことは、私が偉人であることではない。親鸞聖人の人格が聖者であったことは、私が聖者であることではない。

かく考える時、私はついに私でなければなりません。私は私を愛してゆくより外私

が私を救う以外に、私には何の問題もないのであります。あなたが一つの向上をとげた時、世間の批評の如何にかかはらず、あなたは一步の向上をとげたのであります。

如来の音声は、こうした、ほんとに自分を愛する人の胸に誕生するのであります。親鸞聖人が肉食妻帯を断行遊ばした時、世間からは、破戒僧よ、墮落僧よと攻撃されて、あらゆる高僧伝からはねつけられました。けれども、内心の声に忠実であり、一点の虚偽と偽善をゆるすことの出来なかつた聖人はずんずん自分の道を歩まれたのであります。

単なる形式に囚れて、外面には戒をたもつように見せかけて、賢善精進の偽善者たる独身者の偽善僧よりは、聖人が偉大であり、真実であります。

ついに私どもは、私の内面からの声をちつともごまかさぬところに私の道が開いて来ることを知ります

親を見て泣くあなた

あの静かな庭を前に控へた庫裡の講師部屋で、あなたと語つた時の、あなたのお顔を思い出しつつ、この御手紙を見つめます。

御手紙の後半は、親に対するあなたの懺悔でうづめられています。最後にそれについて書かせて頂きます。

親不孝者だと泣いているあなたを尊いと存じます。「私は親不孝者だ。」という声をあまり聞くことが出来ない時になりました。

けれども今少し、肉親の親の底に動くほんとの親心にふれて下さい。そうして一層の不孝者になつて下さい。どん底まで親不孝に目覚めて下さい。そこにはきつと今より別の世界があります。ある青年が、親不孝だつたと目覚めた、又ある女が親の慈悲に目覚めて泣いた時、私はそれらの人の心持を問うて見ました。

「今のあなたは悪人ですか。善人ですか。」

「悪人であります。親不孝者であります。」

「ではあなたの肩には重荷を感じますか。親を思つた時、あなたは苦しいか。」

「少しの荷物も、苦しさも感じませぬ。」

「ではじつとしてることが出来ますか。」

「いいえ、じつとしてることが出来ませぬ。」

「暗い気持ですか。明るい心ですか。」

「光明の天地に出た気がします。」

これが真実に親不孝に徹底して親の慈悲に救われた人の声であります。親不孝に徹するとは、親と自分との間の溝のとれたことであります。親の慈悲が私の裏に蘇つたことでもあります。親子に別れた以前の世界にかへつたことでもあります。親の真実に目覚めた人には親に対する愛と敬の心が生れます。親に対する愛と敬こそ孝の道

であり、これがあなたの行いとなった時、孝行となります。親不孝の目覚めの中にこそ、親への孝道は開かれます。けれども親不孝者だとの涙にとどまってはなりません。もつとはつきり親の心にふれて下さい。親を慕ふ心の声を育てて下さい。きつと親不孝者だとの涙の裏にはニコツと笑うことの出来る天地が生まれましょう。

唯々

私はこれでおきます。真剣なあなたの上に幸あれと祈念して、一層の精進努力をお願い致します。道は存在します。救済は成就されてあります。これを見出すのは人の道であります。若い内に、朝の間に。時はすぐ過ぎます。では御大事に……。